

近江の古瓦 XI 大津 5

「大津5.6」では大津市内のうち、瀬田川の東岸即ち旧瀬田・^{なかが}田上地域について述べることにします。この地域では南大萱^{なほが}東光寺付近と田上の^{いしす}石居にある石居廃寺及び石居廃寺の瓦を焼いたと思われる^{かいは}向畑瓦窯出土の白鳳時代に遡る一群と、近江国衙を中心とするその付近の奈良・平安時代の一群があります。したがって「大津5」では前者の白鳳時代のものに、東光寺付近出土品と関連するものとして近年発見された栗東町の手原廃寺のものを加え、「大津6」では後者の奈良・平安時代のものについて説明することとします。

まず大津市大萱2丁目の現東光寺付近出土の瓦について述べましょう。ここでは以前から二種類の軒丸瓦が伝世品として知られていましたが、最近の発掘調査で、この二種類が確認されると共に新しく四重弧文の軒平瓦が発見され(3)、ほぼその全容が明らかになりました。そのうち法隆寺式とよばれる形式のものは、蓮子が1+6+12で、中房は凸出して瓦当を立体的にしており、外縁の鋸歯文は^{あざ}面違いのものです(1)。もう一つの軒丸瓦はその文様が特殊なもので、草津市北大萱宝光寺跡出土のものと、大きさが少し異なるだけの殆んど同型式のものです(2)。これについてはこのシリーズの[73]「近江の古瓦VI 湖南2」で述べましたが、その文様についてそれを再録しましょう。3弁が中房をはさんで十字に作られ、その間に円周と中心を輻線で結んだ円形が各1個ずつあり、余白を細線で埋めています。中房には蓮子が24個雑然と作られています。外縁は内外に斜面をもち、その両面に鋸歯文があります。このような特

殊な文様の瓦が遠く離れた南北兩大萱で出土することはどのような意味があるのでしょうか。今後の宿題とも言える問題です。

この南大萱の南方約1,000m余の近江国衙の跡で、複弁8葉の軒丸瓦及び所謂法隆寺式と思われる軒丸瓦が各1個出土しており、国衙跡から少し離れた国府域内で四重弧文の軒平瓦が1個発見されました。3個とも破片ですが、複弁8葉のものは外縁が剥落し中房の蓮子も磨滅していてその数は不明です(4)。法隆寺式のものも詳細不明で、かろうじて法隆寺式とわかるものです(5)。四重弧文軒平瓦は端部の破片です(6)。これらはその出土場所に寺院があつてそれに葺かれていた瓦であるとは思われません。あるいは南大萱の寺院の瓦が動いているのかもしれませんが、もちろんこれは単なる推測に過ぎませんから確信はできません。

法隆寺式の軒丸瓦には^{あざ}均正忍冬唐草文の軒平瓦が伴うのが普通ですが、南大萱や国衙ではこの種の軒平瓦は発見されておりません。ところが栗東町^{てし}手原の草津線手原駅付近の手原廃寺から、近年この南大萱の法隆寺式の軒丸瓦と同系統の軒丸瓦が発見されました。そしてこの遺跡では均正忍冬唐草文の軒平瓦も発見されております。この軒平瓦は先に本シリーズの[68]「近江の古瓦V 湖南1」で紹介した栗東町^{ひのく}樋口瓦窯出土の均正忍冬唐草文と同範と思われ、樋口瓦窯が手原廃寺の瓦を焼いたものとわかりました。したがって、あるいは遠く大和へ運ぶために瓦を焼いたのではなからうかと思われていたのが、すぐ近くの寺院のためのものであることがわかり疑問

が解決されました。この手原廃寺の瓦はシリーズ〔68〕で述べたように、従来は本多氏の所蔵品中に1個あるのが唯一の例でしたが、此の度の調査で本多氏所蔵と同じ種類のものを含めて多くのものが発見されました。

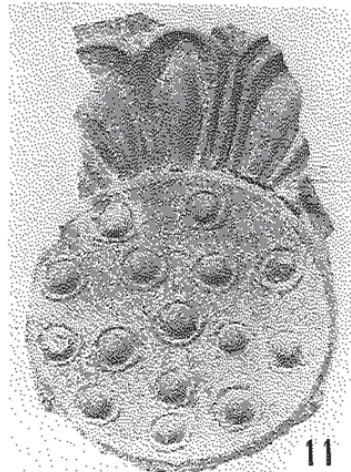
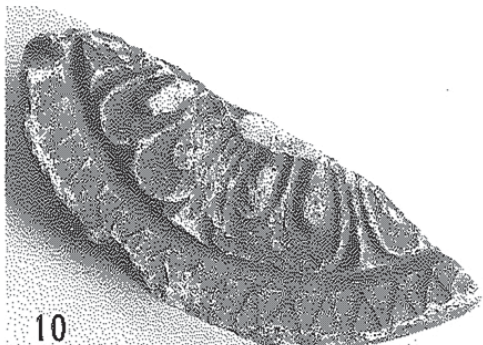
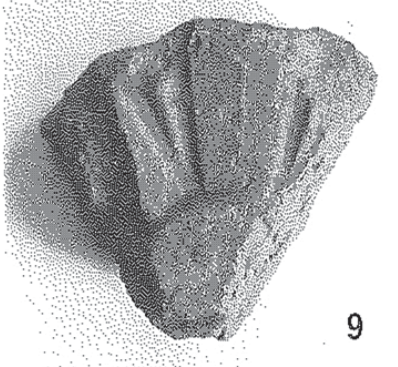
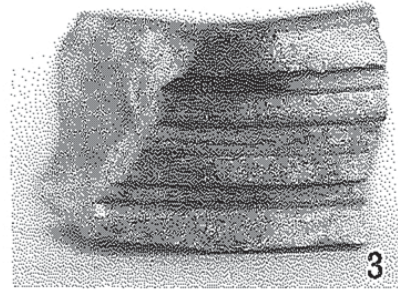
まず弁中に子葉を持たない素弁系のものでは〔68〕で紹介したものと同種のもの(7)がありますが、これについては、やゝ趣を異にするものの殆んど同じ系統と言うべきものが守山市の益須寺跡で出土しており、このことは注意すべきことです。そしてこの種の瓦が変化したと思われるものが2種類発見されました。一は弁にふくらみがあり、間弁が凸出しているもので、蓮子は1+5です(8)。他の一は上に述べたものが簡略化されたと見るべき小破片です(9)。いずれも外縁部が剥落しているので外縁の状態は不明です。次に川原寺式とよばれる複弁8葉で外縁に鋸歯文が施されているものがあります(10)。これは中房部分を欠いていますが、この種のものうち発見の時を異にする1個は1+5+9の蓮子にすべて円圏がある中房の大きなものです(11)。ただしこれは外縁部が剥落しているので前述のものとのくわしい関係はわかりません。またここには法隆寺式とよばれる軒丸瓦がありますが、これは発掘で発見されたのではなく調査の際に付近の寺院にあることがわかったものです。これの表面は磨滅がひどく蓮子の状態は不明ですが、外縁の鋸歯文は面違い鋸歯文で、すべての点で南大萱出土のこの種のものによく似ております(12)。

軒平瓦は三重弧文のものと同種のもの(13、14)と四重弧文のものを2種類(15、16)示しておきました。またこの遺跡では、前述の如く均正忍冬唐草文の軒平瓦(17)が出土しています。これは当然前述の法隆寺式の軒丸瓦に伴うもので、樋口瓦窯で焼かれたものであることはほぼ間違いないでしょう。し

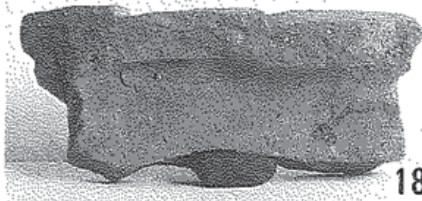
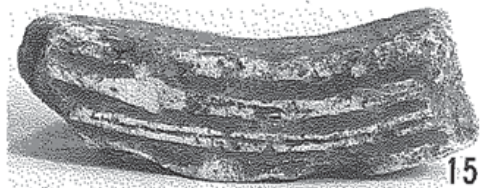
かも〔68〕でも述べているように、益須寺でも法隆寺式のものが出土し、先の素弁系のもものと共に、この手原廃寺と益須寺との深い関係を知ることができます。さらに推測をめぐらすと、このようにこの付近に法隆寺式の瓦が見られることは、法隆寺の財産目録とも言うべき流記資財帳の中に、栗太郡物部郷(現在の守山市の南西部付近か)にその所領の田園などがあったことが記載されており、このような同寺とこのあたりの関係を物の面から示しているのかもしれませんが。なお、この寺院跡からは、寺院の大棟の両端に飾られた鷓尾の小破片が出土しています(18)。

田上地域では大戸川北岸の石居に白鳳時代以来の寺院跡のあることが早くから知られていました。この寺院跡は江戸時代には在原寺などとよばれていたようで、現代もその遺構の一部が礎石列とともに残っています。また龕佛(土製の板に佛を浮彫にしたもの)や泥塔(土で作った小さな塔の模型)の発見などもあって有名となり、大津市の史跡に指定されています。ここの瓦は軒丸瓦は複弁8葉の川原寺式系ですが、外縁に鋸歯文がなく、素文縁で、蓮子は1+8です(19)。ところがこれとは別にその亜流とも言うべき複弁素文縁のもものがもう一種類あります(20)。これに対する軒平瓦は四重弧文のものが大部分ですが(22)、三重弧文のものもあるようで、県の報告書にはその写真が見られます(23)。最近石居の近くの向畑瓦窯で、石居廃寺出土瓦と同じ軒丸瓦(21)や軒平瓦(24)が発見されました。これはこの瓦窯が石居廃寺の瓦を焼く窯であったことを示しています。

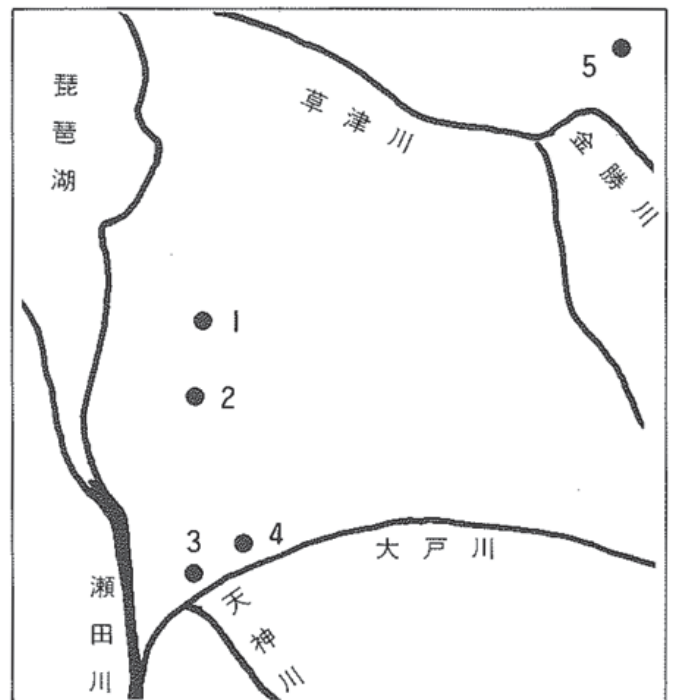
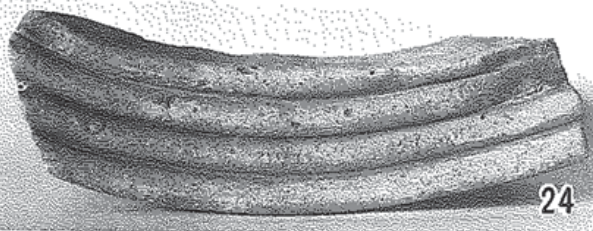
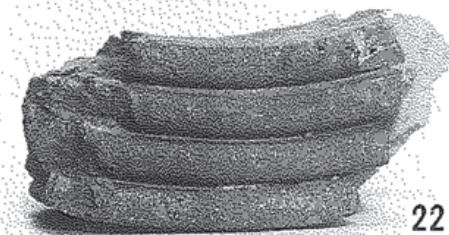
以上白鳳時代を中心とした瀬田川東岸の瓦について述べましたが、この地は近江国衙を中心とした近江国の中核域で、奈良・平安時代のいろいろな瓦が見られます。これについては「大津6」で述べることにします。



1. 2. 3 南大萱
 4. 5 近江国衙
 6 国府城内
 7~12 手原麿寺



13~18 手原廃寺
 19. 20. 22. 23 石居廃寺
 21. 24 向畑瓦窯



古瓦出土地位置図

1. 南大萱 2. 近江国衙跡 3. 石居
 4. 向畑 5. 手原